

【目次】

はじめに

第一節 政治家による邸宅取得の経緯

第二節 政治家による邸宅利用の実態

おわりに

はじめに

近代日本においては、軽井沢、那須、葉山、大磯、箱根、御殿場、沼津、興津など、富裕層の別荘が多数集まる別荘地が多数存在した。このうち大磯（神奈川県中郡大磯町）は、政治家の別荘が数多く集まったことでよく知られている。特に一八八七～一九〇七年頃（明治二〇～三〇年代）の大磯には多くの政客が集い、政治的会合の場にもなったことから、俗に「政界の奥座敷」と称された。大磯は明治後期には別荘地としての最盛期を過ぎたと見られるが、大正期以降も富裕層向けの別荘地としてのステータスを保ち、昭和期に至るまで合計八人の首相（伊藤博文、山県有朋、大隈重信、西園寺公望、寺内正毅、原敬、加藤高明、吉田茂）が邸宅を構えた¹。

このような大磯の別荘地としてのユニークな歴史については、従来主に三つの方向から調査・研究が進められてきた。第一は郷土史的な調査・研究で、大磯町が各別荘の歴史や調査結果をまとめた『大磯のすまい』²、『滄浪閣の時代』³、『吉田茂—その生涯と大磯』⁴、『旧吉田茂邸建物概要』⁵、『大磯町史』⁶などを代表的成果として挙げることができる。また、大磯町による各種調査に関わった鈴木昇（大磯町郷土資料館長）の著作『大磯の今昔』⁷も、別荘にまつわる様々なエピソードを集成した貴重な成果である。第

¹ 多くの邸宅は別荘であったが、晩年の伊藤博文、吉田茂のように大磯に本邸を置いていた政治家もいる。もっとも、伊藤の場合、もともと東京に本邸、小田原に別荘を持ち、やがて別荘を小田原から大磯に移した後それを本邸としたこと、大磯は本邸ではあったが、普段は公務のため東京（首相時代）、京城（韓国統監時代）に居住し、大磯への滞在は一時的である時期も多かったことから、大磯の邸宅は別荘的性格も持っていたとも言える。吉田の場合、養父吉田健三が別荘として建てた大磯の邸宅で幼少期を過ごしたが、東京帝国大学在学中、外務省時代、首相時代はあまり大磯に滞在することはなく、この間大磯の邸宅は別荘であったと言える。他方で吉田は、戦後政界を引退して以降は大磯に居住していたので、この間は明確に本邸だったと言える。このように本邸と別荘の関係は可変的であり、持ち主や時期によって邸宅の性格は変わる。本稿ではこの点について踏み込んだ考察は行わず、基本的に山県有朋、陸奥宗光の大磯邸は別荘、伊藤博文の大磯邸は本邸であったとして分析を進める。

² 『大磯町文化財報告書第三七集 大磯のすまい』（大磯町教育委員会、一九九二年）。

³ 『滄浪閣の時代』（大磯町郷土資料館、二〇〇九年）。

⁴ 『吉田茂—その生涯と大磯』（大磯町郷土資料館、二〇一七年）。

⁵ 『旧吉田茂邸建物概要』（大磯町郷土資料館、二〇一八年）。

⁶ 『大磯町史七 通史編（近現代）』（大磯町、二〇〇八年）。

⁷ 鈴木昇『大磯の今昔』一～一一（鈴木昇、一九七八～二〇一二年）。

二は、建築史の分野による研究で、越沢明⁸、水沼淑子⁹、加藤仁美、鈴木伸治¹⁰、小山七海、荒井歩¹¹などによって、実証的な研究が積み重ねられてきている。第三は政治史分野の研究で、筆者¹²や佐藤信¹³による著作が代表的な成果として挙げられる。現在大磯では、伊藤博文らの別荘跡を明治記念大磯邸園として保存・公開する準備が進められているが（既に一部公開中）、その一環として明治記念大磯邸園邸宅保存活用計画検討委員会が上述の研究成果を踏まえ、さらに調査を進めている。その成果の一部は既に報告書として公開されているが、同報告書は、現時点における別荘地大磯に関する調査・研究の一つの到達点を示している¹⁴。

もっとも、従来の調査・研究によっていまだ解明されていない点も少なくない。とりわけ、政治史分野における実証研究は近年緒についたばかりであり、「政界の奥座敷」と称されていたことがよく知られている割には、大磯が実際に明治政治史においてどのような機能を果たしていたのかは不明な点が多い。そこで本稿では、そもそも大磯にいかなる経緯で政治家の別荘が集まり、政界においてどのように活用されていたのかを検討する。この点を検討するための素材となる一次史料は、地図、公文書、私文書、新聞、雑誌など多数あるが、それらを網羅するのは容易なことではない。本稿では、本格的分析のための準備作業として、ひとまず検討する史料を土地台帳・建物台帳¹⁵、神奈川県有力紙『毎日新聞』（のちの

⁸ 越沢明「湘南の旧別荘の保存問題：特に池田成彬と陸奥宗光邸について」（『日本歴史』五一―号、一九九〇年一二月）。

⁹ 水沼淑子「大磯における初期別荘建築の様相について：旧大磯町行政資料による検討」（『大磯町史研究』一五号、二〇〇八年三月）、水沼淑子「明治期家屋台帳による大磯の初期別荘建築の実態：近代大磯における別荘建築に関する研究」（『日本建築学会計画系論文集』第八一巻七二〇号、二〇一六年二月）をはじめとする水沼氏の一連の論考、研究報告。

¹⁰ 水沼淑子・加藤仁美・鈴木伸治「湘南地域における住宅地形成と景観構造の変容に関する研究：初期別荘地と計画的郊外住宅地の立地特性及び更新の分析から」（『住宅総合研究財団研究論文集』三三号、二〇〇六年版）、加藤仁美・石塚悠子「昭和初期の大磯町の様相：「大磯の図面」の検証から」（『大磯町史研究』一五号、二〇〇八年三月）。

¹¹ 小山七海・荒井歩「神奈川大磯における別荘居住者間の関係性と別荘地の立地特性の変遷」（『東京農業大学農学集報』六五巻三号、二〇二〇年一二月）。

¹² 奈良岡聰智「近代日本政治と「別荘」」（筒井清忠編『政治的リーダーと文化』千倉書房、二〇一一年）、門井慶喜・奈良岡聰智『誰かに教えたくなるレトロ建築の話』（潮新書、二〇二〇年）、奈良岡聰智「近代史跡保存の現状と活用に向けての課題―政治家の邸宅を中心として―」（『日本史研究』七一九号、二〇二二年七月）。

¹³ 佐藤信『近代日本の統治と空間』（東京大学出版会、二〇二〇年）。

¹⁴ 「明治記念大磯邸園 邸宅保存活用計画（案） 中間とりまとめ」（令和二年四月、国土交通省関東地方整備局、明治記念大磯邸園ホームページ、<https://www.ktr.mlit.go.jp/showa/ooiso/teitaku/teitaku.htm>）。

¹⁵ 明治期の大磯の土地台帳・建物台帳は、大磯町および横浜地方法務局西湘二宮支局に所蔵されている。本稿作成にあたって両者を参照したが、内容はほぼ同一であった（どちらかにしか情報がない場合、微妙に情報が異なる場合もある）。閲覧を許可してくださった大磯町立図書館、横浜地方法務局西

『横浜貿易新報』、現『神奈川新聞』の前身)¹⁶などの新聞、「陸奥宗光関係文書」(国立国会図書館憲政資料室所蔵)、『伊藤博文関係文書』、『原敬日記』などの有名史料に限定し、山県有朋、陸奥宗光、伊藤博文ら大磯の初期の「住人」が別荘や邸宅を構えるに至った経緯や、居住の実態を概観することを課題とする。本稿の分析によって、大磯が「政界の奥座敷」になるに至った経緯の一端が明らかになるであろう。

第一節 政治家による邸宅取得の経緯

江戸時代、大磯は東海道の宿場町として栄えていたが、明治期に入ると交通事情の変化を受け衰微した(大磯の位置と前景は【図①】を参照)。こうした状況を一変させたのが、一八八五年に松本順の提唱によって開設された海水浴場で、以後大磯は保養地として発展した。一八八七年に東海道線の延伸(横浜から国府津まで)に伴って大磯駅¹⁷が開設された頃から、大磯は一時的な滞在先としてのみならず、別荘地としても発展を始めた。当初政財界の有力者が別荘を構えた場所は、大磯駅の西側(裏側)に位置する坂田山、東側(駅前)に位置する愛宕山など、相模湾や富士山を臨む景勝地が多かった。古来小湊(こゆるぎ)の磯などと呼ばれてきた海岸沿いも、初期に別荘地として発展した場所の一つである。この地には、山県有朋、陸奥宗光、大隈重信、伊藤博文、鍋島直大、西園寺公望らが邸宅を構えた。このうち、山県、陸奥、大隈、伊藤、西園寺の邸宅跡はほぼ隣接しており、現在明治記念大磯邸園として整備が進められている(【図②】。元山県邸は現大磯中学校)。このように近接した場所に大物政治家が邸宅を構えたのは偶然ではない。以下では、山県、陸奥、伊藤が邸宅を取得した経緯を中心に、この地域がどのようにして別荘地になったのかを分析していく。

(一) 山県有朋

この地域に初めて別荘を構えた政治家の一人が、山県有朋(陸軍卿・陸軍大臣・参謀総長などを歴任)である。彼がこの地(土地台帳の記録上では東小磯二四七～二五八)に別荘を取得し、小湊庵と命名するに至った経緯は十分に明らかではないが、一八八七年という早い時期にこの好立地の別荘を入手できたのは、当時彼が現職の内務大臣であったこと、陸軍で密接な関係にあった松本順(陸軍軍医総監)が大磯海水浴場開設の中心人物であったことから、現地の土地売買をめぐる状況について高度な情報を入手し得たことが関係していたと推定できるだろう。土地台帳によれば、山県は別荘地の多くを「買得」によって取得しているが、残念ながら前の所有者は記されておらず、土地取引の詳細は不明である(海岸沿いの部分は元官有地)。なお、当時の新聞報道によれば、建設中の山県の別荘は、かつて伊藤が夏島に持っていた別荘と同様質素だと見られ、「華美」だという批判は受けていなかった模様である¹⁸。

湘二宮支局に感謝申し上げます。本稿では土地台帳・建物台帳の記載内容を略記するにとどめ、詳細な分析は別稿に譲る。土地台帳・建物台帳を分析した研究例として、水沼淑子「大磯における初期別荘建築の様相について：旧大磯町行政資料による検討」を参照。

¹⁶ 『毎日新聞』から『神奈川新聞』に至る歴史や紙面の概要については、神奈川新聞社編集局編著『一世の軌跡：横濱・神奈川新聞の紙面から』(神奈川新聞社出版局、一九八六年)、大磯町企画政策室町史編さん係編『大磯町史新聞記事目録』第一集(大磯町、一九九五年)を参照。

¹⁷ 当時の言葉では「大磯停車場」であるが、以下本文では原則として「大磯駅」という言葉を用いる。

¹⁸ 『大阪朝日新聞』一八八八年五月一六日。

山県がこの地に別荘を購入した当時、大磯は海水浴で賑わい始めていたが、まだ政治家が集う「政界の奥座敷」とはなっていなかった。しかし、次第に山県のもとを訪れる政客は増えていき、『国民新聞』一八九〇年八月三日には、山県を中心とする「大磯党」と伊藤博文を中心とする「小田原党」（伊藤は同年小田原に別荘滄浪閣を構えていた）が当時対抗関係にあったことを示唆する記事が掲載されている¹⁹。『東京朝日新聞』の記事を追うと、日清修好条規前の時期に、清浦奎吾内務省警保局長（一八八八年九月）²⁰、伊藤博文枢密院議長（八九年一〇月）²¹、陸奥宗光農商相（九〇年八月）²²、野村靖前駐仏公使、大岡育造代議士（いずれも九四年一月）²³といった人物が山県別荘を訪問していたことが確認できる。特に一八九一年四月に山県首相が辞意を表明した際には、陸奥農商相、大山巖陸相、松方正義蔵相、樺山資紀海相、周布公平内閣書記官長ら閣僚クラスの政治家が多数大磯を訪問した²⁴。おそらく彼らは山県の辞職をめぐって何らかの話し合いをしたのだと思われるが、翌月山県内閣は総辞職し、松方正義が次の首相に就任した。当時はまだ山県以外の政治家の別荘は多くなかったが、この頃から大磯が「政界の奥座敷」となる兆しが見え始めたと言える。山県の別荘は、この後大磯が本格的に政治活動を行う場として活用され、「政界の奥座敷」と呼ばれるようになるきっかけを作った邸宅だったのである。

（二）沖守固

あまり知られていないが、別荘地大磯の形成にあたっては、一八八一年から八九年まで神奈川県令・県知事を務めた沖守固が大きな役割を果たしていた。沖は県令・県知事在任中、横浜で水道工事（一八八五年四月～八七年一〇月）、築港（第一次築港：八九～九六年）、市区改正事業（八六年、建築・衛生規則の制定など）という三大事業で功績を残したと評価されている²⁵。沖はイギリス留学経験があり、そこで身につけた英語力を駆使し、県令・県知事として、お雇い外国人などを活用しながらインフラ整備を積極的に推進した。こうした沖の能力は、神奈川県下他地域の地域開発においても遺憾なく発揮されており、近年の研究では、彼が鎌倉町で土木事業、史跡保存や別荘地開発で大きな役割を果たしたことが指摘されている²⁶。一方沖は、一八九五年以降個人として鎌倉の旧長谷村・旧扇ヶ谷村などの土地を本城清彦（第百銀行横浜支店長、東京貯蓄銀行取締役などを歴任。沖と同郷の元鳥取藩士）から購入し、広大な土地資産を形成した。沖は晩年同地で居住、死没しているが、彼が取得した土地の多くは、のちに原亮三郎、岩崎小弥太、荘清次郎らの手にわたった。このように沖は県知事時代に鎌倉で旺盛な

¹⁹ 「小田原党と大磯党」（『国民新聞』一八九〇年八月三日）。

²⁰ 『東京朝日新聞』一八八八年九月五～七日。

²¹ 『東京朝日新聞』一八八九年一〇月一五日。

²² 『東京朝日新聞』一八九〇年八月三日。

²³ 『東京朝日新聞』一八九四年一月一日。

²⁴ 『東京朝日新聞』一八九一年四月一二日、一四日、一八日、二八日、二九日。

²⁵ 堀勇良「沖守固の横浜三大事業—明治二十年前後のまちづくり—」（『横浜開港資料館報』二六号、一九八九年三月）。

²⁶ 浪川幹夫「明治二十年代都人士による土地所有一旧長谷・坂ノ下・極楽寺村の場合—」（上）（『鎌倉』九三号、二〇〇一年一二月）八四～八六頁、奥山信治「鎌倉の別荘地形成過程における沖守固の動向について」（『鎌倉』一一八号、二〇一五年一月）。

不動産投資活動を行っていた。

神奈川県下の土地の取得や開発で強い影響力を持っていた沖は、大磯においても同様の活動を行っていた。沖は、大磯に別荘を構えた最初期の「住人」の一人である。別荘をいつ取得したのかははっきりしないが、『毎日新聞』によれば、一八八八年八月に別荘を建築中と報じられている²⁷。土地台帳によれば、沖は一八九二年以降、本城清彦、古田理三（経歴不詳）から東小磯から西小磯にかけての海岸沿いに広大な土地を購入していた。家屋台帳を見ると沖がこの土地内に家屋も所有していたことが確認でき、彼が好立地にあるこの別荘地を自らも利用していたのは間違いないと思われるが、投資も目的としていた可能性が高い。実際沖は、取得した土地の一部を一八九三年に吉川泰二郎（日本郵船社長）・慎一郎（泰次郎の長男）に売却し、翌年にはその南隣の土地を陸奥宗光に売却している。沖はそれ以前に大磯駅前の愛宕山でも広大な土地を購入・売却しており、彼が旺盛な不動産投資活動によって多額の利益を上げていたことは確実である。実は当時沖には、「自家殖産上に汲々として、唯一意是れ勉む」という噂があり、神奈川県郡部の有力者の間で不評だった模様である（そのため長崎県知事への転任を命じられたが、彼が不満を示したため、元老院議員に転じることになったという）²⁸。このように大磯が別荘地として発展した背景に、投資目的による積極的な土地の売買が介在していたことには留意する必要があるだろう。

「沖守固関係文書」（国立国会図書館憲政資料室所蔵）にはこれらの土地取得に関係する史料はほとんど含まれていないが、長州出身の有力外交官青木周蔵が稲村ヶ崎の土地取得で沖に協力を求めた書簡が残っており²⁹、上述した影響力の一端が窺われる。大磯との関連で興味深いのは、同書簡に収録されている以下の松本順書簡である³⁰。

益御清福拝賀候也。扱兼テ御承知も有之候海水浴病舎建設之儀、老生友人中ニ於甚執心之者有之〔川村某〕最本牧三ノ谷者地形も宜海水も清澄好適地に候間、右へ建立致度候所其土者牛込村供有地ニテ他より手出候テハ民情如何と甚懸念候ニ付、何と歎以御工夫不公然とも無礙滞様御取計相願度。固より東京医林中ハ賛成候へ共尚此上令公閣下之御信抛ヲ蒙候へ者財主〔実者保平〕之踏込も宜大便利と存候間、自然御逢之節カ又者御序ニ御伝語にても若浴場之冀事御称誉被下候へ者別テ大慶仕候事ニ御座候。依之此通相願候。拜具

二月九日 松本順

沖守固殿

〔追伸〕 参上可相願候所汽車定時に得ず粗略なから書中拝相願置候。何れ□□にても拝顔相願度候。其折萬縷。

この書簡から、松本が海水浴場および病院（病舎）の開設を目指していたこと、本牧の三ノ谷（三ノ谷。現横浜市中区。三溪園がある辺り）をその候補地とし、土地取得のため沖を頼りにしていたことが

²⁷ 『毎日新聞』一八八八年八月一六日。

²⁸ 大岡力『地方長官人物評』（長島為一郎、一八九二年）一四七頁。

²⁹ 年不明一〇月二六日付沖守固宛青木周蔵書簡（「沖守固関係文書」国立国会図書館憲政資料室所蔵）。

³⁰ 年不明二月九日付沖守固宛青木周蔵書簡（「沖守固関係文書」）。

分かる。残念ながら正確な時期は不明であるが、一八七九～八四年（松本が陸軍軍医總監を辞任してから初めて大磯を訪問するまで）に海水浴場の適地を求めて全国行脚をしていた時期³¹と推定される。本牧での土地取得はうまく行かなかったようで³²、実際には松本は一八八四年から大磯で海水浴場開設の準備を進めることになるが、同書簡の筆致からは松本が沖を非常に頼りにしていたことが窺われる。松本が大磯での海水浴場開設にあたり沖に何らかの形で協力を要請したかどうかや、沖がそれに応えて便宜を図ったかは不明であるが、彼が大磯に最初期に別荘を持った有力者の一人であることを考えると、その可能性は高いように思われる。

前述したように、沖には神奈川県知事時代に自己の財産を殖やすのに汲々としているという批判が寄せられていた。沖が死去した際に『横浜貿易新報』に掲載された追悼記事は、このことを否定しているものの、同時に彼がかなり豊かな生活を送っていたことを伝えており、こうした批判にあながち根拠がなかった訳ではないようにも思われる。興味深い記事なので、以下に関連部分を引用する³³。

神奈川県々令時代の沖男爵

〔一九一二年一〇月〕七日鎌倉の自邸に逝ける元本県知事沖男爵の昵近者に就き其逸事を聞くに

▲長寿の血統〔略〕

▲珍しい孝行者〔略〕

▲故旧を忘れず〔略〕

▲投機事件は大嫌ひ

知事時代に多くの土木事業を起したれば莫大の私財あるべしなど噂するものあれど、男爵は平素旧知の為に私財を投じ、又土地を発展せしむる事業に対しては自ら投資して土地繁栄の為に尽したれば、資産として数ふべき程のものなく唯箱根蘆の湖畔の殖林、南多摩郡の造林は男爵が世襲財産として開拓し置きたるものなり。又男爵は平素投機事業を蛇蝎の如く嫌ひ、華族中にて投機に関はる者に対し憤慨し居たり。

▲在職中の功績

本県知事在職中に於ける男爵の功績を挙げれば枚挙に遑あらざるも、其一二を挙げれば、郡部にては金沢新道、塔の沢より宮の下に通ずる新道、鎌倉及び箱根に於ける別荘の開祖及び其土地の発展に努めたる事等なるが、横浜市に対しては築港工事着手、横浜水道創設、揮発物貯庫建築、教育方面にては横浜商業学校設立、県教育会設置等なり

▲富貴楼より通勤

酒と女の道楽は唯知らぬものなく、維新の壮年当時の男爵の酒量は五升との評判なり。富貴楼の盛なる

³¹ 畔柳昭雄『海水浴と日本人』（中央公論新社、二〇一〇年）七〇～七三頁。

³² 松本良順の伝記では、彼が本牧の十二天、浦賀、熱海で海水浴の効果を試していたことが紹介されているが（鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』東京医時新誌局、一九三三年、二四六頁）、本牧の三ノ谷での土地取得を目指していたことは記されておらず、詳細は不明である。

³³ 「神奈川県々令時代の沖男爵」（『横浜貿易新報』一九一二年一〇月八日）。管見の限り、他紙にこれ以上詳しい追悼記事は出ていない。池田侯爵家家令の山根光友は、沖死去の際『読売新聞』の取材に対して、「頗る磊落な人」であったなどと振り返った（『読売新聞』一九一二年一〇月八日）。

時代に於ては同棲より通勤し、常に三四名の妓に伽をなさしめ、老年に至るも尚ほ二三名の妾を蓄へ置きたり。趣味としては絵画を好み、自ら書けるもの又少なからず。晩年酒を廃して囲碁に耽けるも碁碁の方なりしと。

(三) お倉

あまり知られていないが、大磯の海岸沿いが別荘地として発展するのに寄与した、お倉という人物についても考察しておきたい。一八九〇年代には、山県別荘（現大磯中学校）と陸奥別荘（現明治記念大磯邸園の一部）の間に群鶴楼という建物が存在した。これは、横浜で政財界有力者のサロンのような役割を果たしていた料亭・富貴楼の別荘で、この地で「第二富貴楼」のような形で料亭として営業していたようである³⁴。経営者のお倉は政財界の大物と密接なつながりを持った人物としてよく知られており、横浜開港一五〇周年の際には、お倉を主人公とした芝居が上演されたこともあるほどである³⁵。彼女は、多くの政財界の有力者とつながっていたが、陸奥、伊藤とは明治初期以来格別懇意にしていたようである。大磯に群鶴楼を開業したのも、そうした人的つながりの所産であったと推察される。

後述するとおり、群鶴楼は陸奥、伊藤が好んで利用していたことが新聞報道から確認できるが、営業の実態については不明な点が少なくない。『大磯のすまい』は群鶴楼に言及しておらず、巻末の「別荘所在リスト」に、お倉の夫・斎藤亀次郎（住所：横浜市尾上町五丁目七八番地）が明治二五年に木造和風平屋建ての建物が建築していたことを記しているのみである。山県別荘と陸奥別荘の間の土地は、明治以来所有者が何度か変わり、文筆・合筆も繰り返されてきたため、土地の変遷が非常に複雑であるが、第二次世界大戦後に大磯中学校の校地となったこともあってか、これまで土地の来歴がきちんと調査されてこなかった。本稿でも詳細な分析する余裕はないが、さしあたって①現大磯中学校の校地周辺には明治期にいくつかの別荘があったこと、②その一部は戦前期に古河家によって買収され、古河家別荘に組み込まれていたこと、③戦後に大磯町がその一部を買収して、大磯中学校を開校したことを指摘しておく。

【図③】は、『読売新聞』一八九四年八月七日および一二月二六日に掲載された群鶴楼の広告である。文面から、群鶴楼がこの年旅館として開業したこと、夏には海水浴客をターゲットとした旅館として営業していたこと、冬には貸別荘としても営業し、海水浴設備もあったことが分かる。当時はまだ別荘が少なかったため、同棲がある場所は、「町の南海辺松林の中」「遠く塵俗と屏ける幽邃の地なれば襟懐常爽快を覚へ」と説明されていた。眺望の良さもアピールポイントで、楼上からは「相模湾房山総嶺」を一望でき、「月下の金波」が楽しめる謳われていたことが注目される。こうした眺望の良さは、山県、陸奥、伊藤の邸宅とも共通していたと思われる。

(四) 陸奥宗光

³⁴ 鳥居民『横浜富貴楼お倉』（草思社、一九九七年）二五〇～二五六頁。ただし、鳥居氏は一八九二（明治二五）年から営業したとしているが、根拠が示されておらず当否は判断しかねる。

³⁵ 『エンドレス・ドリーム ヨコハマの夜明け』（同実行委員会、二〇〇九年）。劇の内容については、「横浜夢座のゆく年くる年 一映像と音楽で振り返る「エンドレス・ドリーム ヨコハマの夜明け」」（五大路子・横浜夢座 YouTube チャンネル、<https://www.youtube.com/watch?v=YOp8zhBznFs>）も参照。

陸奥宗光は肺結核の持病を持っており、農商相（一八九〇～九二年）、外相（一八九二～九六年）などの要職で激務を続ける中で、体調を悪化させた。陸奥もそのことは自覚しており、日清戦争前から熱海³⁶、横浜の原善三郎の別荘³⁷などでしばしば静養していたが、同戦争における開戦外交や講和をめぐる厳しい外交交渉は着実に陸奥の体調を蝕んだ。こうした状況で、陸奥は療養を主目的として、一八九四年一二月に大磯に別荘を取得するに至った（一八九七年七月に若干の土地を買い増している）。

陸奥が購入したのは、東小磯二六五、二八〇、二八一などの土地であった。この時の購入に際して、陸奥がどこから資金を調達したのかは不明だが、古河市兵衛（古河グループの創業者）から資金的援助を得ていた可能性がある。陸奥は、一八八三年に次男潤吉を養子として入籍させるなど³⁸、かねて実業家古河市兵衛と密接な関係を持っていた。陸奥の死後この地が古河家に譲られることを考えると、もともとこの別荘地の取得の段階で、古河家から援助していたと考える方が自然かもしれない。

陸奥がこれらの土地を購入したのは、沖守固（元神奈川県知事）からであった。以下参考のため、陸奥が購入した土地（息子廣吉時代に拡張された土地は除く）に関する土地台帳記載の主な情報を示す。

・東小磯二六五：沖守固（入手経緯・年月不明）→陸奥宗光（明治二七年一二月買得）→陸奥亮子（三〇年一〇月相続）→陸奥廣吉他一名（三四年五月所有権取得）→古河潤吉（三七年六月所有権取得）→古河虎之助（三九年五月所有権移転）→古河従純（昭和一八年九月家督相続）

・東小磯二七九一：沖守固（入手経緯・年月不明）→吉川泰二郎（明治二六年一一月買得）→吉川慎一郎（二九年一月相続）→陸奥宗光（三〇年七月買得）→陸奥亮子（三〇年一〇月相続）→陸奥廣吉他一名（三四年五月所有権取得）→古河潤吉（三七年六月所有権取得）→古河虎之助（三九年五月所有権移転）

・東小磯二八〇・二八一：本城清彦（明治二一年？一〇月買得）→沖守固（二五年一〇月買得）→陸奥宗光（二七年一二月買得）→陸奥亮子（三〇年一〇月相続）→陸奥廣吉他一名（三四年五月所有権取得）→古河潤吉（三七年六月所有権取得）→古河虎之助（三九年五月所有権移転）

陸奥自身がこの土地にどのような経緯で着目し、いかなる交渉を経て沖から購入に至ったのかは明らかではない。ただ、陸奥も短期間（一八七一～七二年）ではあるが神奈川県令を務めた経験があること、同じく神奈川県令を務めた経験を持ち、彼の腹心中島信行（最初の妻が陸奥の妹、初代衆議院議長）が大磯町で土地を熱心に探していた記録が残っていること³⁹、大磯に別荘を取得する以前に山県の大磯別荘を

³⁶ 『東京朝日新聞』一八九二年一月三日。

³⁷ 『東京朝日新聞』一八九四年四月二七日、五月五日、同年五月三日付伊東巳代治宛陸奥宗光書簡（「伊東巳代治関係文書」国立国会図書館憲政資料室所蔵）、原奎一郎編『原敬日記』一卷（福村出版、一九六五年、以下巻数略）一八九四年四月二五日条。陸奥は流行性感冒後衰弱していたため、四月二五日から五月五日か六日まで横浜に滞在した。妻を同伴し、富貴楼で小憩した後馬車で原別荘に赴いている。

³⁸ 五日会『古河潤吉君伝』（五日会、一九二六年）。

³⁹ 大磯町出身の自由民権運動家山口左七郎の文書には、中島が山口に大磯の良い土地を探すことを依頼したり、土地売却のことを報告したりした書簡が残されている（大畑哲他『山口左七郎と湘南社』まほろば書房、一九九八年、一五九頁）。

訪問した経験があったことなどから、陸奥はもともと大磯のこの辺りの土地に関する知識はある程度持っていたと推測される。一八九四年七月に日清戦争が勃発した後、陸奥の体調は思わしくなく、九月には大磯で静養している⁴⁰。当時の滞在先は不明だが、陸奥はこの時大磯に別荘を購入する準備を進めたのではないかと推測される。前述したとおり、陸奥は明治初期から富貴楼のお倉と懇意にしており、妻や伊藤などとも一緒によく訪問していた⁴¹。お倉が事実上経営していた群鶴楼はこの年八月から旅館として営業を開始したようであり、そのことが別荘購入の直接的きっかけになった可能性もある⁴²。なお、家屋の工事の関係があったのか、あるいは旅館の方が快適だったのか、陸奥は別荘を購入した後も群鶴楼に宿泊することがあった⁴³。

(五) 伊藤博文

伊藤は一八九〇年に小田原に別荘滄浪閣を構えたが、その後、「滄浪閣への往復の途次、旅館招仙閣へ度々寄っていたが、交通の便（東海道線が興津から御殿場廻りであったこと）や、梅子夫人の療養を考慮して、明治二九年〔一八九六年〕滄浪閣を移した」とされている⁴⁴。ただし、従来の文献では、伊藤が一八九〇～九六年に大磯とどのような関わりを持っていたかが必ずしも明らかではない。そこで以下では、まず小田原在住時代の伊藤と大磯の関わりについてやや詳しく検討する。

伊藤が一八九〇年に東京高輪の本邸を引き払い、小田原に居を構えたのは、憲法制定作業が一段落したのを機に、政治の中心から一步引いて充電しようと考えたためであった。彼は一八八八年に首相から枢密院議長に転じた後憲法制定作業に邁進していたが、翌八九年一〇月にその職を辞し、責任ある地位から退いている。『楚辞』に由来する「自然の成り行きに任せて身を処する」という意味を込めて滄浪閣と命名したのは、伊藤の心情がよく表れているように思われる⁴⁵。八九年一〇月四日、伊藤は山県有朋に書簡を送り、小田原に蟄居する心情を以下のように記している⁴⁶。

⁴⁰ 『東京朝日新聞』『読売新聞』一八九四年九月八日。

⁴¹ 別荘購入に近い時期では、『東京朝日新聞』一八九三年五月一〇日、一八九四年四月二七日で確認できる。

⁴² 差出年不明で、内容も判然としないが、次の書簡は、富貴楼のお倉が陸奥の大磯別荘購入に何らかの関与をしていたことを示唆しているように思われる。「今日富貴楼に立寄り候処、例の大磯の家の事を話し出したる故、総ての行懸りを話し聞け老婆も御尤とは申候へ共、大隈の方えの義理を今更打捨がたき事情あるべし。故に大隈の旅行中是非此程の御話の通りなりとも、又古河の方なりとも決定し置く方可然、政之助は電信にて呼戻すべし。小杉へも先日話いたし置候へ共、老兄にも是非御働き被下度候。右迄。」（年不明四月二五日付岡崎邦輔宛陸奥宗光書簡、伊藤隆・酒田正敏『岡崎邦輔関係文書・解説と小伝』一六六頁）。

⁴³ 『東京朝日新聞』一八九五年六月二二日、九月一九日。

⁴⁴ 前掲、『大磯のすまい』一六五頁。

⁴⁵ 前掲、奈良岡聰智「近代日本政治と「別荘」」五二頁。

⁴⁶ 一八八九年〔推定〕一〇月四日付山県有朋宛伊藤博文書簡（尚友倶楽部・山縣有朋関係文書編纂委員会編『山縣有朋関係文書』一、山川出版社、二〇〇五年）一一六頁。

「如御承知小生は近来隠居同様小田原に蟄居、世事之紛擾を避け誠心只一に邦家之安寧内閣諸公の目的通り万事成功に至り至尊之宸襟を安せられん事を緘黙祈祷罷在候。」

一八九〇年の新聞報道によれば、伊藤は小田原の「隠宅」に二〇〇余株の牡丹を植えて愛玩していたという。当時の閑情を詠んだ伊藤の漢詩として、以下がある⁴⁷。

「僻地無人叩竹関 任他世上自喧譁 日斜客去困碁罷 又汲泉流澆牡丹」

伊藤は小田原転居も貴族院議長、枢密院議長を務めたものの、小田原や神戸の別荘に滞在するのが常とし、上京の機会が減ったため、明治天皇が心配することもあった模様である⁴⁸。その間も、山県有朋が大磯から、井上馨が箱根から小田原に赴いて伊藤と会合を持つ（一八九〇年八月）⁴⁹、山県と野村靖駐仏公使が塔ノ沢滞在中の伊藤を訪問した後、一同揃って帰京して陸奥農商相を加えて会合を行なう（一八九一年五月）⁵⁰、山県が大磯から小田原を訪問する（一八九二年三月）⁵¹、伊藤が小田原から箱根塔ノ沢にいる井上を訪問する（一八九二年八月）というように⁵²、伊藤は小田原周辺で山県、井上らとしばしば会っていた。もっとも、当時滄浪閣には多くの政客が訪れていたわけではなく、小田原は「政界の奥座敷」には程遠い状況であった。

この間伊藤は、しばしば横浜を訪問した。横浜では高島嘉右衛門や原善三郎の別荘に滞在することがあった他⁵³、料亭富貴楼をよく利用した⁵⁴。伊藤は明治初期以来お倉と懇意にしており、富貴楼の常連客であった⁵⁵。一方伊藤は、海水浴場ができたのを機に大磯にも関心を持つようになったようである。一八八八年には、伊藤梅子夫人が療養のため大磯で海水浴をしたところ健康が快方に向かったため、伊藤自身も折々に海水浴に赴くようになり、ついには三島通庸の別荘の近くに別荘を設ける計画ができたという新聞報道がなされている⁵⁶。実際にはこの時別荘は建てられておらず、伊藤が海水浴をしたという報道も正確ではない可能性があるが、この頃から伊藤が大磯という地に関心を持つようになったのは確かであろう。伊藤は一八八九年一〇月に枢密院議長辞職を申し出たが、その際小田原から大磯に赴き、山県とそ

47 『東京朝日新聞』一八九〇年三月一四日。

48 『伊藤博文公年譜』（伊藤公追頌会、一九四二年）一八七頁。

49 『東京朝日新聞』一八九〇年八月二二日。

50 『東京朝日新聞』一八九一年五月三一日。

51 一八九二年〔推定〕三月一四日付伊藤博文宛山県有朋書簡（伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書』八巻、一九八一年、一二七頁）。

52 『東京朝日新聞』一八九〇年八月一六日。

53 『東京朝日新聞』一八八九年九月三日、一八九〇年五月一三日。

54 『東京朝日新聞』一八九〇年二月一八日（佐野常民と共に訪問）、『読売新聞』一八九一年四月二五日（井上馨が伊藤と待ち合わせ、ただし面会できたかは不明）、『読売新聞』一八九二年二月三日（沖守固と共に訪問）。

55 前掲、鳥居民『横浜富貴楼のお倉』を参照。

56 『読売新聞』一八八八年七月五日。

の別荘で会談を行なっている。その後伊藤は上京して閣議に出席した後、横浜の富貴楼に一泊した後小田原に戻ったが⁵⁷、伊藤を説得するための会合が開催されることになり、伊藤、山県内相と大隈外相の三人が山県別荘に参集している⁵⁸。

伊藤は一八九二年に首相の座に復帰すると、再び政界で中心的役割を果たすようになり多忙となった。ただし、この年秋に交通事故に遭遇したため、伊藤は翌年にかけて体調が思わしくなく、療養のため大磯を頻繁に訪問するようになった。この年伊藤は、大磯の岩崎家別荘と招仙閣に長期滞在し、リューマチなど体調不良からの回復に努めている⁵⁹。これ以降伊藤は大磯に本格的に通うようになり、日清戦争前後や戦争中も何度か大磯を訪問し、滞在していたことが確認できる⁶⁰。この間梅子夫人も療養のため大磯を訪れ、招仙閣などに滞在していた⁶¹。

こうして伊藤は、療養をきっかけとして大磯の地への理解と愛着を深め、ついに一八九五年一月に自らの別荘を購入するに至ったが、そこには二つの大きな政治問題が関わっていた。第一は陸奥外相の療養・辞任問題である。陸奥は日清戦争中激戦をこなしていたが、時に広島や京都の大本営を離れて兵庫県舞子で静養することもあるほど体調を悪化させていた⁶²。そこで一八九五年五月に下関講和条約が批准されると、陸奥は六月五日から賜暇を得て、大磯の群鶴楼で療養生活に入った（大磯を拠点とし、時折上京する生活）。六月三〇日、陸奥の腹心である原敬（外務次官）が大磯を訪れ、陸奥と会談したが、陸奥は橋本綱常医師の診察では「此際少くも二ヶ月間も休養せざれば大患に陥るべし」というような状況であった。そのため原は陸奥に賜暇期限の延期と今後事務を一切見ないことを勧告した。陸奥はそれを受け入れ引続き療養に努めたが⁶³、健康は容易に回復せず、陸奥は八月二六日に伊藤首相に辞表を提出するに至った⁶⁴。しかし、伊藤は辞表を差し戻し、二八日に病氣全快まで静養すべき旨の恩命が天皇から下された。当時伊藤内閣は、戦後経営をめぐる議会から協力を取付ける必要に迫られており、そのために衆議院第一党である自由党との提携・入閣交渉が進められつつあった。陸奥は自由党と深いつながりを持っており、伊藤内閣が同党との提携関係を築く上で要となるべき人物であった。そのため伊藤は陸奥の辞任を許可せず、外相にとどまったまま療養を続けさせるという異例の措置を取ったのであった。

第二の問題は、今まさに述べた自由党との提携問題であった。自由党は伊藤内閣への協力に前向きな姿勢を見せたが、その代わりに主要閣僚などのポストを強く要求した。しかし、日清開戦前まで激しく対立してきた政府と自由党の折合いは容易ではなく、政府内の一部から自由党への反発が噴出したことなどから、提携条件をめぐる交渉は難航した。事態の打開策を図りかねた伊藤は、一月一二日から二月一五日にかけて大磯の群鶴荘に引き籠もった⁶⁵。新聞報道では、大磯滞在中インフルエンザと脳病にかか

57 『読売新聞』一八八九年一〇月一四日。

58 『東京朝日新聞』一八八九年一〇月一五日。

59 『東京朝日新聞』一八九三年一月二二日、六月一五日。

60 『東京朝日新聞』一八九四年一月一六日、一八九五年一月一六日、二月二六日、六月一八日。

61 『読売新聞』一八九三年三月一九日、『東京朝日新聞』一八九五年八月二七日。

62 『読売新聞』一八九五年一月一五日、四月三〇日。

63 『原敬日記』一八九五年六月三〇日条。

64 『原敬日記』一八九五年七月二五日条。

65 『東京朝日新聞』一八九五年十一月一五日、一二月一七日、『読売新聞』同年十一月二〇日、一二月

ったとされていたが⁶⁶、自由党との提携交渉が難航したことによるストレスが影響したものと思われる。結局提携交渉は翌年まで長引き、四月一四日に板垣退助自由党総理が内相に就任することで決着した。しかし、既に財政政策をめぐる対立から松方正義蔵相が辞任するなど動揺していた伊藤内閣は、その後も不安定な状況が続き、最終的に一八九六年九月に総辞職した。

興味深いことに、伊藤が大磯に別荘を購入したのは、このように首相として政権運営に最も悩んでいた時期（一八九五年十一月）であった（その後一八九七年四月に買い増し）。伊藤の心事を直接示す史料は残されていないが、陸奥や板垣ら自由党幹部と折衝を続ける中で、大磯に自らが自由に使える別荘を欲しくなったのではないかと推定される。ちなみにこの時の大磯滞在中、伊藤は群鶴楼に宿泊し、陸奥は自分の別荘に滞在していたようである⁶⁷。

伊藤が購入した西小磯五八などの土地の元の所有者は、実業家の上郎幸八と今村清之助であった。この両名は建物を建てていなかったようで、投資用として土地を所有していたものと推測される。参考までに、伊藤博文時代に購入された主な土地の来歴を記すと以下の通りである。

- ・西小磯八五イー一：池田輝知（取得経緯・年月日不明）→沖守固（明治二五年一二月買得）→上郎幸八（二八年一〇月譲受）→伊藤博文（二八年十一月買得）→伊藤博邦（四三年一月所有権取得）→李王職長官李載克（大正一〇年八月二日所有権移転）→檜橋渡（昭和二一年二月売買）→西武鉄道株式会社（二六年五月売買）
- ・西小磯八五イー二：沖守固（取得経緯・年月日不明）→上郎幸八（明治二八年一〇月譲受）→伊藤博文（二八年十一月買得）→伊藤博邦（四三年一月所有権取得）→李王職長官李載克（大正一〇年八月二日所有権移転）→檜橋渡（昭和二一年二月売買）→西武鉄道株式会社（二六年五月売買）
- ・西小磯 85 ロ-2：今村清之助（取得経緯・年月日不明）→伊藤博文（明治三〇年四月買得）→伊藤博邦（四三年一月所有権取得）→李王職長官李載克（大正一〇年八月二日所有権移転）→檜橋渡（昭和二一年二月売買）→西武鉄道株式会社（二六年五月売買）

伊藤の詳しい心事は分からないものの、この土地の取得の経緯については、直接的史料（伊藤博文宛陸奥宗光書簡）が残されており⁶⁸、ある程度の事実が分かる。特に重要な史料なので、やや長くなるが、以下に全文引用する。

過日は御来訪被下緩々高話拝聴之機を得、実に近来の愉快不過之候。偕其節御下命有之候地所の義其筋の者に内話いたし結果は、彼の横浜人某の所有地即ち鍋島の邸地を圍繞したる高地山林は一坪に付弍円三拾銭と云ふ。尤も全体にても切り坪にても売却すべし。又彼の学校地と云ふ地所は村会の決議にて一

一七日。『原敬日記』では一二月一六日帰京と記されているが、複数の新聞報道に記されている一五日が正確だと思われる。

⁶⁶ 『読売新聞』一八九五年十一月二六日。

⁶⁷ 『東京朝日新聞』一八九五年一二月四日。

⁶⁸ 一八九五年〔推定〕十一月五日付伊藤博文宛陸奥宗光書簡（伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書』塙書房、七巻、一九七九年所収）。

坪金壹円五拾銭と決定せりと云ふ。何れも愈実地買入に懸り候得は尚ほ少々割引も可致候得共、此上一歩を進め候而は退歩し難き事情有之候に付、今一応尊慮承り候上決行可致と存じ候。今日小生は案内者（即ち百足屋と云ふ此事の周旋人）を連れ実地見分候処、兩地とも景色は拙宅よりは遙に秀絶に有之、前面海を眺むるのみならず、左右後に富士、箱根より高麗山を見るを得へし。而して現状に於ては横浜某の地面は無論に学校之地所よりは優等なれとも、若し学校地所に大に地上けすれば（此砂は御料林より得へし）必ずしも著しき劣等にも有之間敷、茲に略図上白色にて他人持と書したる分の外は皆現今の売物にて、図面淡赤色（桃色歟）の分は学校附属地にして他は横浜人所有なり。而して綠色なる山林は何れも其地面の附属にして同代金にて購入し得べく、特に学校地面と御料林との間に細長き三百坪程の山林は全く遊地にして学校地面に附属し居れば、学校地面譬へは千五百坪を壹円五十銭にて購入すればおまけにただにて此三百坪の山林を得る訳なれば、其実一坪壹円五十銭よりは余程廉なるへし。唯今百足屋より聞取りたる所を拙筆にて相認め申し候。大概御分りに相成候哉。併愈御購入と相成候へは今一応実地御見分被下候事相叶間敷哉。若し急に御来遊出来兼候へは、誰か（末松にては）名代人御遣はし被下候へは（若し侯爵夫人御自身に御出被下候へは尤も妙なりと拙妻云ふ）、小生も大に安心仕候。何れにも至急御回答被下度候。匆々頓首

十一月五日

宗光

春畝老相閣下

愈何れの地面にても御購入と相成候へは前面の御料林を借用する事必要なり。然るに鍋島も定て借用願出申す可く、若し同家にて余り広く借用すれば此方の分か狭くなる故、岩村へ御一声置被下候事肝要なり。

この書簡から判明することは、以下のようなことである。

- ・同地の購入は、陸奥宗光の仲介によるものであり、陸奥は大磯の旅館百足屋（経営者は宮代謙吉）の助力を得ていた。
- ・陸奥は伊藤に購入を勧めるにあたり、同地を「鍋島の邸地を圍繞する高地山林」と表現しており、小高くなっている一帯があったことが分かる。
- ・土地売却にあたっては、全体または部分どちらの購入も可能であった。売り主の「横浜人某（上郎幸八のこと）」は一坪二円三〇銭という値段を付け、値引きも可としていた。
- ・伊藤が最終的に購入した土地に含まれていたのかは判然としないが、伊藤は「彼の学校地と云ふ地所」（こちらは一坪一円五〇銭）の購入も検討していた。この土地の価格決定は村会の決議によったとされている⁶⁹。
- ・実地検分した陸奥は、「兩地とも景色は拙邸よりは遙に秀絶に有之、前面海を眺むるのみならず、左右

⁶⁹ 「土地台帳」を見る限り、大磯町は伊藤への売り主になっていない。また、「学校地」とされているのは、明治初期にこの辺りに大磯小学校があったためであるとも推測されるが（『大磯小学校八十年史』大磯小学校創立八十周年記念事業委員会、一九五三年）、場所が判然としないため詳細は不明である。あるいはこの土地は西小磯八四一（当時所有者は大磯町）を指していて、この時伊藤が購入せず、一八九九年に西園寺が購入したものだったという可能性も考えられる。

後に富士、箱根より高麗山を見るを得べし」と述べ、その景色を絶賛していた。

鍋島邸がどのような様子であったのか、「学校地」とはいかなる意味なのかなど、不明な点も少なくないが、伊藤が土地を取得した経緯とその頃の周囲の状況はこの書簡からかなり判明する。とりわけ、景色が陸奥邸よりも「遙に秀絶」であると陸奥が絶賛していたことは大変興味深い。こうして取得した土地を伊藤がどのように活用したのかについては、次節で検討したい。

第二節 政治家による邸宅活用の実態

前節では山県、陸奥、伊藤らが大磯に邸宅を取得するに至った経緯を個別に検討した。本節ではこれを踏まえて、彼らがその後邸宅をどのように活用したのかを検討していく。

(一)「政界の奥座敷」になるまで

松本順の提唱により大磯にわが国初の本格的な海水浴場が開設されたのは一八八五年のことであるが、翌年まではコレラの流行もあって来訪者は期待されたほど多くはなく、関係者は大いに失望した。この状況を一変させたのは一八八七年七月の大磯駅開設であった。それまで東京から大磯へ行くには、横浜駅から人力車などを使うしかなかったのに対して、鉄道を利用した場合、東京（新橋駅）からの所要時間が二時間二〇分へと大幅に短縮されたことにより、海水浴客は大いに増加した⁷⁰。管見の限りでは、『東京横浜毎日新聞』紙上で八五年の大磯海水浴場開設に関する記事は見つけられなかったが、八七年七月の大磯駅開設以降、『毎日新聞』（同年『東京横浜毎日新聞』から改題）で海水浴場に関する報道が積極的に行われるようになったことが確認できる。以下の二つの記事は、同年七月に仮開業（八月に本開業）した旅館（兼病院）禱龍館に関するものである。榎本武揚通相らを含む三〇〇名が出席し、余興に市川團十郎、左團次らが登場するなど、趣向を凝らし、盛大な開業式が開催されたことが分かる。開業当時既に大磯の各旅宿には京浜地方各地から四〇〇名が宿泊していたというから、既に禱龍館以外の宿泊施設も活況を呈し、大磯における海水浴がブームになりつつあったことも窺われる。

○大磯の禱龍館⁷¹

曾て記せし如く松本良順、松平太郎等の諸氏が発起にて大磯に開きたる海水浴場禱龍館（曩に濤流館と記せしは誤り）は準備も殆んど整ひたれば、来る廿四日より仮に開業し、来月七日に至りて盛んなる開業式を行ふ筈なるよし、当日は松本氏の周旋にて俳優社会の大檀那とも云ふべき團十郎を東京より呼び何にかの催ふしありといふ。

○大磯の禱龍館⁷²

何処に限らず鉄道線路の通ずるに随ひ沿道にて其地適応の業を開きて鉄道の益を利かせ世人の便を図るに勉むるは宜しく世間有志の心掛くべきことにて、土地の繁昌を招くの基礎ともなることなり。茲に大

⁷⁰ 前掲、畔柳昭雄『海水浴と日本人』七四～八三頁。

⁷¹ 『毎日新聞』一八八七年七月二一日。

⁷² 『毎日新聞』一八八七年八月九日。

磯小ゆるぎの浜は至極海浴に適し且つ風景もある上東海道鉄道の便開けて駐車場の地ともなりければ此所に海水浴場を開かんとて先頃より松平太郎、松本順等の諸氏発起し禱龍館といへるを設けたるが粗ぼ落成せしに付、一昨日京浜間より貴紳国手の人々及び新聞記者発起人知因の諸氏凡そ三百名近くを招き、盛んなる開業式を行へり。此日同地は高麗神社の祭日と同館の開業とを兼ねて頗る賑ひ、此外右海水浴の爲め京浜より出掛けて土地の旅店等に止宿し居るもの四百人近くもあるとのことなれば、旁た近年になく引立ちし景気なり。禱龍館は停車場より駅に入りて右へ三丁程を行きし所の左側にあり。入口には緑門を設け、国旗を掲げり。館は残らず日本造りの二階屋にて海に向ひ楼下左側に添ふて海水浴場（即ち⁷³海浜）の入口を設く。招待賓へは夫々饗応ありて余興に煙火を打ち挙げ且つ團十郎、左團次、芝翫其他新富座の俳優数名、落語家燕枝、小さんなど席を周旋し、中にも升蔵、橘次等の茶番ありたり。海水浴には来賓気儘に入りて打寄する大波小波に体を打たせ、或は磯に枕して余波に揺らせるなど面白くも心地爽かに覚へ出るを忘るる計りなりし。浜の傍らに麦藁にて龍を造り、蜃婦が珠を奪ひ去る所の飾り物ありたり。来賓中には榎本通信大臣、長与衛生局長等を見受けしが、多き中には夕方より帰途に就くあり、又た前日より江の島鎌倉を廻り来て此の海水浴に立寄り夫れより小田原まで越さんとして出立し、飽迄鉄道の便を利かせて数日の消暑を為す人あり、又たは泊まり込むなど思ひ思ひなりし。同館は楼上楼下とも客間大小交ぜて三十余間及び料理室、海水浴場等ありて、浴客の滞在中は日本料理なり、西洋料理なり好みに応じて調理しお極客の便を計る趣きなれば、旁た同館の繁昌を期すべきなり。

この年は東海道線延伸の影響で、鎌倉や大磯での海水浴を兼ねて箱根方面に出かける旅行客が激増したようで、「箱根に遊ぶ者陸続引きも切らず」という状況であった⁷⁴。『毎日新聞』は、清国の徐承祖駐日公使も大磯で海水浴を楽しんだ後、箱根七湯に赴いたことを報じていた⁷⁵。同紙記者によれば、大磯駅の開設前、この地方の旅行客は平塚か小田原に宿泊するのが一般的だったため、大磯には貸座敷を除けばこれという旅宿がなく、この頃ようやく旅宿を開業する者が出始めているという状況であった。その意味で、大磯駅の開設と禱龍館の開業は、大磯にとって非常に大きな出来事であったと言える。

この年以降『毎日新聞』には、政府高官が大磯で海水浴を行ったり、同地に別荘を新築したりすることを報じた記事が登場するようになる（ただし、誤報もあった）。一八八九年夏までの主なものを列挙すれば、以下の通りである。

一八八七年

八月一日 山田顕義司法大臣と長与専齋衛生局長：高麗山付近に土地を取得し、別荘を新築〔実際には建てなかったよう〕

一八八八年

五月二六日 三島通庸警視總監：病気療養のため大磯の海水浴場へ

七月五日 伊藤博文伯爵：大磯の簾田に別荘を新築〔実際には建てず〕

八月一六日 高木兼寛軍医總監、三島警視總監、沖守固神奈川県知事：大磯に別荘新築中

⁷³ 『毎日新聞』一八八七年八月二八日。

⁷⁴ 『毎日新聞』一八八七年八月二五日。

⁷⁵ 『毎日新聞』一八八七年九月一六日。

八月一七日 尾崎忠治大審院長：大磯で海水浴

一八八九年

三月一九日 大隈重信外務大臣、鳩山和夫取調局長：沼津に向かう途中で大磯に宿泊

七月二七日 西東京控訴院長：避暑のため大磯に滞在

九月一日 後藤象二郎逓信大臣：大磯から帰京

一八八八年発行の『相陽大磯駅全図』には松本順、高木兼寛、三島通庸、山県有朋、沖守固らの別荘が記載されているが、彼らの別荘は以上のように大磯に急速に人が集まるようになる中で建設されたものであった。翌年の『毎日新聞』には大磯の新築別荘（土地六〇〇坪余）の広告が掲載されており⁷⁶、別荘用の土地取引が活発化していた様子が窺われる。また、一時的な来訪者・滞在者が増えるにつれて、旅館も整備されていった。同年一二月の『毎日新聞』に掲載された「大磯海水温浴の広告」には、以下の旅館が名前を連ねている⁷⁷。

石井源太左衛門、百足屋謙吉、いわしや棟太郎、山本屋秀三、太田楼、宮代屋伊三郎、角屋半右衛門、青柳楼

このうち百足屋は、前述した通り大磯町長も務める宮代謙吉が経営していた旅館で、この後大磯を代表する旅館に成長する。一八九〇年に病氣療養のために新島襄が滞在し、亡くなった場所としても知られており、現在同旅館の跡地には石碑が建てられている⁷⁸。

明治中期の海水浴が今日とは異なり医療に近いものであったことはよく知られている。そのため禱龍館は旅館とはいっても病院を兼ねたような施設で、「海水浴客」には病気の患者が少なからずいたし、新島のように海水浴を行わず、専ら療養・静養目的で大磯に滞在する者も多かった（新島が大磯に滞在したのは、一八八九年一二月二七日から逝去する九〇年一月二三日までの二八日間）。その後も、後述する中島俊子をはじめ、大磯で病氣療養を行った者は少なくない。ただし、その後の発展のあり方を考える上で、平塚の杏雲堂平塚病院（一八九六年開設）、茅ヶ崎の南湖院（一八九九年開設）、鶴沼の鶴沼海浜医院（一九〇六年開設）のようなサナトリウム（結核療養施設）が大磯に建設されなかったことも重要である。大磯には療養・静養目的で滞在する者もいたものの、大規模な療養施設はできず、明治後期以降海水浴が今日のようなスポーツや娯楽に近いものになっていくと、大磯の海水浴場は次第に今日のようなレジャー施設として発展していくことになる。また、結核はかつて不治の病として忌み嫌われ、療養所の建設に際しては住民による反対運動が起こるのが常であったが、一八八〇～九〇年代に政財界の有力者の別荘が立ち並んだ大磯では大規模な療養施設の建設が具体化することはなく、明治後期以降も富裕層のための別荘地というイメージが損なわれることは基本的になかった。このことは、大磯と湘南の周辺諸地域との違いを考える上で重要である。

⁷⁶ 『毎日新聞』一八八九年六月二〇日。

⁷⁷ 『毎日新聞』一八八八年一二月二二日。

⁷⁸ 百足屋については、大越哲仁「新島襄と百足屋と愛松園：最晩年の新島が大磯で暮らした場所はどこか」（『新島研究』一〇七号、二〇一六年二月）を参照。

(二)「政界の奥座敷」としてのスタート

このように保養地として発展した大磯が「政界の奥座敷」となるにあたっては、一八八七年に同地に別荘を構えた山県有朋の存在が大きいことは、前節で指摘した。もっとも、新聞報道を精査すると、大磯が「政界の奥座敷」として機能し始めたのはそれより少し後の一八八九年頃からであったことが分かる。

この年政界では、二月に大日本帝国憲法が発布されたが、その後大隈重信外相の条約改正案をめぐって政情不安定となった。一〇月には伊藤博文が条約改正に反対して枢密院議長の辞表を提出し、その一週間後に大隈が玄洋社社員に襲われて重傷を負った。これをきっかけに黒田清隆内閣は同月に総辞職し、三条実美内大臣が首相を兼任する期間が約二ヶ月続いた後、一二月に山県内相が首相に就任した。この間政局の鍵を握っていた伊藤、山県という二人の実力者は、しばしば自らの別荘と東京を往来していた。伊藤は憲法起草の際、夏島に作った別荘に滞在し、井上毅、金子堅太郎ら幕僚と論議を重ねたが⁷⁹、憲法発布後同地に陸軍の砲台建設が始まったことから、この年小田原に別荘を移していた（翌九〇年に新築が成った別荘は、滄浪閣と命名された）⁸⁰。

一〇月一日に枢密院議長を辞任する前、伊藤は小田原に滞在していたが、小田原から大磯に移動して、同地滞在中の山県と会談した後⁸¹、上京して閣議に辞表を提出した⁸²。伊藤は閣議の場から辞去すると、永田町の官舎に立ち寄った後横浜に移動し、馴染みの富貴楼に宿泊した。翌一二日、大隈外相は新橋から横浜に移動して、富貴楼で伊藤と会談した⁸³。その後両者は同道して大磯の山県別荘を訪れ、何事か協議を行った。山県は協議が終わると大隈は帰京し、伊藤は小田原の別荘に戻った⁸⁴。他方でこの日山県別荘には、鳥尾小弥太陸軍中將も来訪した⁸⁵。また一三日には、長州出身の有力者野村靖、青木周蔵が大磯の山県別荘を訪れた⁸⁶。こうして種々情報を入手した後、山県は一四日に大磯から上京し、

⁷⁹ 伊藤の邸宅の変遷については『滄浪閣の時代』（大磯町郷土資料館、二〇〇九年）、伊藤の夏島別荘については楠山永雄『伊藤博文公と金沢別邸：金沢は明治憲法のふるさと』（金沢郷土史愛好会、二〇〇九年）を参照。

⁸⁰ 末松謙澄『孝子伊藤公』（博文館、一九一一年）二八二頁。伊藤の小田原別荘については、小笠原清「滄浪閣土塁の現況報告」（『小田原市郷土文化館研究報告』五〇号、二〇一四年三月）も参照。

⁸¹ 『毎日新聞』一八八九年一〇月一三日。伊藤は山県との会談に井上毅と高島嘉右衛門を同伴しており、会談には東京から来た芳川顕正内務次官も同席したという。また、内相秘書官の中山寛六郎は一一日に大磯から上京して後藤象二郎逓相と会談した後、再び大磯に戻ったことも報じられていた。

⁸² 『毎日新聞』一八八九年一〇月一三日。

⁸³ 『毎日新聞』一八八九年一〇月一三日。大隈ら政府関係者は当初伊藤の居場所が分からず、だいたい探しづらい。

⁸⁴ 『毎日新聞』一八八九年一〇月一三日。

⁸⁵ 『毎日新聞』一八八九年一〇月一三日。

⁸⁶ 『毎日新聞』一八八九年一〇月一五日。西郷従道も大磯を訪問したと報じられていた。訪問先は記されていないが、おそらく山県のもとを訪れたのだと思われる。

黒田首相と面会した。その後、一〇月一六日には黒田首相が小田原に伊藤を訪問し⁸⁷、一〇月一九日（大隈外相が襲撃された翌日）には山田顕義が大磯と小田原を訪問していることが確認できる⁸⁸。また十一月九日には、山県が小田原を訪問している。

このように、一〇月一日に伊藤が枢密院議長の辞表を提出してから一二月二四日に山県内閣が成立するまでの間、当時の政界実力者たちは、東京、小田原、大磯の間を頻繁に往来していた。小田原、大磯に多くの政治家が訪れたのは、ひとえに伊藤、山県という実力者がそれぞれの別荘に滞在していたからであるが、当時小田原は東海道線が通っておらず不便だったため（国府津から人力車〔一八九〇年からは馬車鉄道、一九〇〇年からは電気鉄道〕で移動する必要があった）⁸⁹、小田原よりも大磯に政治家が集まる機会の方が多かった。おそらくこの時が、大磯が「政界の奥座敷」として機能した初めての機会であったと考えられる。

山県の首相在任中（一八八九年一月～一八九一年四月）、大磯は海水浴場としてますます発展を遂げたが、山県首相がしばしば大磯に滞在し、有力政治家が大磯を訪問する機会も少なくなかったことから、同地は政治的にも注目された。特に山県が内閣総辞職する前、病氣療養を名目に大磯に滞在して面会を謝絶して際には、特に新聞報道の注目の的となった⁹⁰。山県は首相を辞任した後も、しばらく大磯に滞在して東京に出てこなかった⁹¹。なお山県内閣で農商相を務めた陸奥宗光も、この頃何度か大磯に滞在しており⁹²、一八九二年の正月には横浜の富貴楼に滞在した後大磯に山県を訪問し、その後直ちに熱海に移動する予定であると報じられている⁹³。一八九一年には大磯の禰龍館で立憲自由党員の懇親会が開催され、党首の板垣退助らが参加している⁹⁴。

伊藤博文は一八九三年から個人的に大磯によく滞在するようになった。このことは『毎日新聞』の報道からも裏付けられる。同年同紙に掲載された伊藤の大磯滞在に関する記事を列挙すると、以下の通りとなる。日清戦争中はそれぞれころではなかったようで、大磯に滞在したという報道は確認できなかったが、梅子夫人の療養のためもあって、大磯への滞在が着実に増えていった様子が窺われる。

一八九三年

一月一三日 伊藤、一昨日大磯から小田原へ赴く。

一月二八日 伊藤、一昨日大磯から帰京し、伊皿子邸に入る。

三月一九日 伊藤、昨日大磯に赴き二〇日まで滞在予定。伊藤夫人はかねて大磯で療養中。

六月八日 伊藤、リウマチによる背部の疼痛の治療のため一昨日大磯へ。

六月九日・一三日・一五日 伊藤、大磯の招仙閣に滞在中。

⁸⁷ 『毎日新聞』一八八九年一〇月一九日。

⁸⁸ 『毎日新聞』一八八九年一〇月二二日。

⁸⁹ 熱海線（東海道線）が開通し、国府津・小田原間が便利になるのは一九二〇年のことである。

⁹⁰ 『毎日新聞』一八九一年三月一八日、一九日、二四日。

⁹¹ 『毎日新聞』一八九一年四月一二日、二一日。

⁹² 『毎日新聞』一八九〇年八月八日、一八九一年四月一四日、一八九二年一月三日。

⁹³ 『毎日新聞』一八九二年一月三日。

⁹⁴ 『毎日新聞』一八九一年一月一四日。

六月一七日 伊藤、大磯から帰京。西園寺公望を同道。
一八九四年
一月一四日 伊藤、一昨日大磯へ赴く。
一月一六日 伊藤、一昨日大磯から帰京。
一八九五年
六月二二日 伊藤、夫人を伴って大磯に赴く。
七月一二日 伊藤、大磯に赴く。
七月一四日 伊藤、山県、陸奥、金子堅太郎一昨朝大磯で会合。
八月一一日 過日来横浜の原善三郎別荘に滞在していた伊藤、大磯に陸奥（八月一一日『毎日新聞』では加養療養中で危篤と報じられていた）を訪問した後、箱根へ向かう。
八月二七日 伊藤、一昨日大磯へ。
一二月一日 東大磯の群鶴楼に滞在中の伊藤、インフルエンザに罹るも格別のことなし。
一二月七日 伊藤、大磯に別荘を普請中。
一二月一七日 久しく大磯に療養中の伊藤、帰京し伊皿子邸に入る。

この間伊藤は一八九五年一一月に大磯に別荘地を取得したが、翌月の『毎日新聞』にはさっそく別荘の新築工事が始まったことが報じられた。伊藤の小田原別荘が滄浪閣と称していたことは既に有名だったようで、大磯の別荘が「第二の滄浪閣」と呼ばれているのが興味深い。短文だが工事の様子が分かる貴重な記事なので、以下に引用する。

○伊藤侯爵別荘の普請⁹⁵

伊藤首相大磯の別荘には海手の窪地に昨今土盛りを為して数十人の土方人夫入込み中々盛んなり。第二の滄浪閣なるかな。

伊藤が大磯に長期滞在するようになったのは、自分や夫人の体調も一因だったが、伊藤内閣が議会や自由党との対立に直面し、政治的困難に立たされていたことも関係していた。九五年一二月七日の『毎日新聞』には、自由党との軋轢を避けて大磯に引き籠っているとして伊藤を批判する風刺画が掲載された（【図④】）。風刺画は「大磯の湯浴」と題され、伊藤が大磯への滞在を求める声と帰郷を求める声の板挟みになっていることを示すセリフが以下のように記された。また、伊藤が大磯の海水温浴から出られなくなっていることを揶揄した狂歌も一緒に掲載された。

○大磯の湯浴⁹⁶

「お捨て下さるな」

「進退困り申すぞ」

「出し申さぬ」

⁹⁵ 『毎日新聞』一八九五年一二月七日。

⁹⁶ 『毎日新聞』一八九五年一二月七日。

○狂歌狂詠 頓々子

法螺吹た後で であれんでられんと 湯気にあがりて いかにせんとう

なお一二月八日の『毎日新聞』には、「別荘地としての大磯」と題された記事が掲載され、この頃大磯が別荘地として人気を博していたので、鳴立沢のあたりも騒がしくなり、地価も高騰していたことが記されている。この記事から、伊藤が滄浪閣建設の工事を始めた一八九五年の時点で大磯は既に別荘地として有名になり、喧噪や地価の高騰が問題になっていたことが分かる。

○別荘地としての大磯⁹⁷

伊藤侯、山県侯、陸奥伯、樺山伯、徳川侯（尾州）、宍戸子の別荘向背相望み、西行法師が寂しきを啣ちたる鳴立沢辺も熱鬧を以て聞ゆるの名区となりたれば随て地価も非常に騰貴し、好地位の部分は一坪五円位に売買せらるると。

（三）陸奥宗光による別荘利用の実態

日清戦中から戦後にかけて、陸奥の健康状態が良くないことは政界で周知の事実であり、陸奥宛の書簡にはよく体調を気遣う言葉が添えられた⁹⁸。陸奥の大磯滞在は、お雇い外国人医師ベルツの助言によるものでもあり⁹⁹、陸奥は彼の診察をしばしば受けつつ、大磯町内を散策したり、富貴楼お倉と雑談をしたりしながら時を過ごした¹⁰⁰。しかし、外交や政局が慌ただしく動く中で、陸奥が療養のみに専念することは許されなかった。一八九五年九月には、伊藤首相が遼東問題談判のため自ら渡清しようとするのを止めさせるため、陸奥はわざわざ大磯から帰京して伊藤と会談を行なった¹⁰¹。翌年二月には、朝鮮国王高宗のロシア公使館亡命（露館播遷）への対応を協議するため、急遽帰京したこともあった¹⁰²。一八九五年の年末から翌年始にかけては、大磯に伊藤首相（群鶴楼に宿泊）、西園寺外相代理（松林館に宿泊）、山県前法相（別荘に宿泊）、自由党の板垣総理、三崎亀之助、鈴木充美、竹内綱（百足屋）が集まり、互いに往来した¹⁰³。このように大磯の政治化傾向は続いており、日清戦後の政局の活発化に伴い、大磯は以前にも増して「政界の奥座敷」として機能するようになっていたと言えるだろう。

陸奥はいつまでも休暇を取り続けるわけにはいかないと、四月四日に大磯から帰京した¹⁰⁴。同月一四日には板垣自由党総理が内相に就任しており、陸奥の帰京はこれと関係するという観測もあった

⁹⁷ 『毎日新聞』一八九五年一二月八日。

⁹⁸ 例えば、一八九五年四月二日付陸奥宗光宛土方久元書簡（「陸奥宗光関係文書」）。

⁹⁹ 一八九五年九月一九日付伊藤博文宛陸奥宗光書簡（前掲、伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書』七巻、328頁）、『東京朝日新聞』一八九五年八月一日。

¹⁰⁰ 『東京朝日新聞』一八九五年六月二二日。

¹⁰¹ 『原敬日記』一八九五年九月一八日条。

¹⁰² 『原敬日記』一八九六年二月一四日条。

¹⁰³ 『東京朝日新聞』一八九六年一月七日。

¹⁰⁴ 『原敬日記』一八九六年四月四日条。

105。しかし、陸奥の体調は依然回復しなかった。五月一七日に大磯で陸奥と面会した原は、陸奥に外相を辞職するよう勧めた。これに同意した陸奥は一九日に帰京し、伊藤首相に辞職を申し出たが、伊藤は許可しなかった。原は、伊藤が陸奥の辞職を許可しなかったのは後任を得るのが困難だったからだを見て¹⁰⁶、陸奥のために惜しんだ¹⁰⁷。しかしついに三〇日に伊藤も陸奥の辞職に同意し、西園寺文相が外相を兼務することになった。

この年の夏陸奥はベルツの勧告に従い、ハワイで療養生活を送った¹⁰⁸。この旅行中陸奥の体調は回復したかのようであったが、時々微熱が生じるなど決して万全ではなく、ハワイ大統領による歓迎行事など身体の負担になるような行事も行なわれた¹⁰⁹。旅行中に陸奥が従弟の岡崎邦輔（代議士）に宛てて送った書簡が残されている。ハワイでの様子や大磯との比較など興味深い記述が多いので、以下に引用する¹¹⁰。

「去る五日無事当地へ着、一統無事。小生容体は頗る好し。詳しくは看護婦より難波に申遣し候間同医師より御聞取被下度候。此地気候は思ひしよりは冷温にて、正午八十五度より昇らず、貿易風の通路故に終日終夜風吹き、夜に炎気を覚へず。大磯よりは固より涼しくのみならず、或は箱根宮の下の気候にして、冷氣少しく微温を帯ぶる位に候。小生一行着後暑気の小言は無之、反之小生は一兩日より少々感冒の気味にて有之、是も今日は全快なり。此模様なれば一月位の滞在は少しもさし支え無之、猶前文申残したるは山海之風景也。小生の住居は Waikiki〔ワイキキ〕と申海浜にして、庭迄海水参り候へ共、去とて大磯などの如き風浪は無之、釣り網或は夜中鎗にて魚を刺し候など、随分慰は多く候。此便は亮子より麻へ書状不遣、前文之次第御序に御申聞け可被下候。」

八月に帰国した後、陸奥は大磯で行なわれた伊藤内閣閣僚の会議に参加するなど元気な様子で¹¹¹、伊藤首相は陸奥の再任を希望していたようだが、原や息子廣吉が心配したとおり陸奥の体調は万全ではなく¹¹²、次第に体調は衰えていった。十一月には陸奥家扶の名前で、陸奥は大磯の別邸で養病中のため、書簡などは全てそちらに送るようお願いする新聞広告が出された¹¹³。もっと一八九七年一月の正月には、

105 『東京朝日新聞』一八九六年四月二日、五日。

106 『原敬日記』一八九六年五月二七日条。

107 『原敬日記』一八九六年五月一九日条。

108 『東京朝日新聞』一八九六年六月一六日、七月二四日、八月一六日。

109 『東京朝日新聞』一八九六年八月二三日。

110 一八九六年〔推定〕七月九日付岡崎邦輔宛陸奥宗光書簡（前掲、伊藤隆・酒田正敏『岡崎邦輔関係文書・解説と小伝』一二四～一二五頁）。

111 『東京朝日新聞』一八九六年八月二八日。

112 一八九六年〔推定〕八月二八日岡崎邦輔宛原敬書簡（前掲、伊藤隆・酒田正敏『岡崎邦輔関係文書・解説と小伝』一二五～一二九頁）、一八九六年八月一三日付原敬宛陸奥廣吉書簡（原敬文書研究会編『原敬関係文書』三巻、日本放送出版協会、一九八五年）。

113 『東京朝日新聞』一八九六年十一月一八日。

大磯で伊藤、山県、陸奥らが集まり、写真撮影に興じるようなこともあった¹¹⁴。

この年の六月二日、原は大磯南下町の小島氏所有の土地に別荘を新築することを決定していた¹¹⁵。日記に家屋新築の理由は書かれていないが、療養に専念する陸奥と会う機会をできるだけ確保するためだったのではないかと推定される¹¹⁶。当時既に朝鮮公使に任命されていた原は、六月二五日東京を出発したが、間もなく第二次松方正義内閣が成立し、外相に嫌悪する大隈重信が就任したため、原は公使辞任を決意し、一〇月一二日に東京帰着した。陸奥は原の帰りを待ち望んでおり、この日品川駅で原を待ち受けていた岡崎邦輔が陸奥からの伝言を原に告げ、翌日原は大磯で陸奥と面会した¹¹⁷。以後原は、公職を離れて時間があるのを利用して毎月大磯の別荘を訪れた。『原敬日記』から原の大磯滞在記録を拾うと、以下のようなになる。

- ・一〇月二七日、原、大磯で陸奥と面会。
- ・十一月五日、原、大磯の別荘に赴く。六日、帰京。
- ・十一月二一日、原、大磯に陸奥を訪問。夜帰京。
- ・一二月四日、原、大磯に陸奥を訪問。面会后直ちに帰京。
- ・一月一二～一五日、大磯別荘滞在。
- ・一月一七～二〇日、大磯別荘滞在。
- ・一月二二～三〇日、大磯別荘滞在。
- ・二月六～一三日、大磯別荘滞在。
- ・三月二四～三一日、大磯別荘滞在。
- ・四月五～一一日、大磯別荘滞在。
- ・五月七日、横浜から帰京の帰途、大磯に陸奥を訪問。

一～四月に原が陸奥と面会したかどうかは不明である。病状が悪化していたことを考えると、面会を遠慮していたとしても不思議ではない。また残念ながら、この間原は陸奥と重要事項を多々話し合っていたものと思われるが、日記に会話内容は記されておらず、詳細は分からない。五月一二日、陸奥は帰京し西ヶ原邸に入った¹¹⁸。六月に入って間もなく陸奥は重体となったが、その後やや持ち直した。原は八月一二日、一四日、一六日、一八日、二三日と西ヶ原邸に陸奥を訪問した。二人が最後に会話を交わしたのは一六日であったが、原は内心「是れは多分最後なり」と思っていたため、その気持ちを隠して平然と会話をすることに苦痛を覚えた。陸奥は別れ際に原に対して何事か話したような様子で、原もまたそれを望まないわけではなかったが、陸奥の病状悪化を懸念して、暗涙を催しつつ敢えて立ち去った。八月二四

¹¹⁴ 「大磯の新年」(『読売新聞』一八九七年一月一〇日)。

¹¹⁵ 『原敬日記』一八九六年六月二日。

¹¹⁶ 前掲、拙稿「近代日本政治と「別荘」」。

¹¹⁷ 原は一四日に大磯で伊藤、山県にも面会した後、帰京した(『原敬日記』一八九六年一〇月一二～一四日)。

¹¹⁸ 『東京朝日新聞』一八九七年五月一四日。陸奥は帰京に先立って、大磯で伊藤と会談している(同五月六日)。

日、ついに陸奥は西ヶ原邸で死去した。原はその日のうちに西ヶ原邸を訪問して、陸奥家と共に諸事を周旋した。彼はこの日の日記で陸奥との親交を振り返り、陸奥農商相に秘書官として仕えて以来「爾後今日に至るまで余は全力を挙げて伯を補佐し伯亦深く余を新任したり、而して今日幽明境を異にす、悲しまざるを欲するも豈得べけんや。」と記した。この日の記述は、長期間書き継がれた原の日記の中でも最も感情に満ちた部分となっている¹¹⁹。

陸奥は原との別れ際にまた話を聞きに来るよう述べていたが、既に死を覚悟し、前年六月二〇日付で遺書を準備していた。遺書は九月一二日に西ヶ原邸で開披され、妻亮子、長男廣吉、次男潤吉の面前で、今村清之助、岡崎邦輔が立ち会う中、原が朗読した。遺書の邸宅に関する部分では、西ヶ原邸は廣吉が、大磯別荘に関しては亮子が相続するものとされていた¹²⁰。この遺言は守られ、前節で土地台帳の記載を紹介した通り、大磯別荘は亮子に相続された。その後同別荘は、一九〇〇年に亮子が死去すると廣吉らに引き継がれ、やがて古河家の手に渡ることになる。

療養中、陸奥は日清戦争の経緯を振り返った回顧録『蹇々録』の執筆に心血を注いでいた。同書には多くの版があることが知られているが、現在最も流布している岩波文庫版の前書きの末尾に「明治二十八年除夜大磯において」と書かれており¹²¹、一八九五年中に骨格部分は出来上がっていたようである。しかしその後も陸奥は、西園寺公望や在外公使に原稿を送って意見を求めつつ、推敲を重ねた。原や岡崎らいわば身内の者たちも、一八九六年末までには同書の原稿を読んでいたようである¹²²。同書完成の経緯は分かっていないものの、長い時間をかけて推敲した同書は、陸奥にとって大きな不満が残るものではなかっただろう。

晩年に陸奥が大磯で要人と面談した際に、大磯ならではの特色が表われた例を二つ紹介したい。第一は、一八九五年五月一三日の原敬（外務省通商局長）との面会である。この日陸奥は京都で重要会議を終え、午前〇時七分京都発の汽車で帰京の途に就いた。陸奥はこの途中敢えて大磯で下車し、同地に宿泊した。その際陸奥は原を呼び出し、重要な相談を行なった。すなわち、林董外務次官を駐清公使に転任させ、林の後任として原を外務次官に昇格させることを内談したのである。原は日記に「陸奥大臣京都より帰京。昨日〔一四日〕大磯に一泊、同処にて面会を望む旨電報あり、依て同地に赴き即日帰京せしが、余を林の後任として次官に採用すべき内談なりき。」と記録している¹²³。『東京朝日新聞』の報道を見ると、陸奥は一三日夜に大磯に宿泊した後、一四日午後四時新橋着の汽車で帰京し、同地で各省次官、外務省高等官など多数の出迎えを受け、西ヶ原の邸宅に入っている¹²⁴。もし京都から直接東京に入った場合、大勢の人に出迎えられて、とてもこのように原と立ち入った話をゆっくりする時間は取れなかったであろう。このように大磯訪問は、人目やメディアからの取材を避け、要談を行なう上で好都合であった。

¹¹⁹ 『原敬日記』一八九七年八月一二～二四日。

¹²⁰ 『原敬日記』一八九七年九月一二日。

¹²¹ 陸奥宗光著、中塚明校注『新訂 蹇々録：日清戦争外交秘録』（岩波文庫、一九八三年）。

¹²² 一八九六年〔推定〕一二月二五日岡崎邦輔宛原敬書簡（前掲、伊藤隆・酒田正敏『岡崎邦輔関係文書・解説と小伝』一三〇～一三一頁）。

¹²³ 『原敬日記』一八九五年五月一四日。

¹²⁴ 『東京朝日新聞』一八九五年五月一四日、一五日。

第二に、一八九五年六月一七日に芳川顕正法相が大磯に陸奥外相と山県前法相を訪問した際、事前および事後に陸奥に送った書簡を紹介したい¹²⁵。この日芳川は両者を訪問することになっていたが、陸奥と山県の別荘が非常に近くにあり、訪問の様子や順序がはっきりと分かってしまうため、もし先に陸奥と会っていたことが分かれば、山県から無用な不信感を抱かれかねないと懸念していた。そのため芳川は、事前に陸奥に手紙を送って、ひとまず山県の目に触れにくい場所で陸奥と会いたいと伝え、理解を求めた。文面は以下の通りである。

度々御電報之趣敬承。昨日電信ヲ以御答申置候通り、本日午後之汽車ヨリ罷出可申手筈ニ致置候処、頃日来凱歸兵隊運搬之為汽車甚都合悪シク相成、今夜十一字之汽車ナラデハ無之様困却申候。依而明朝八時半之便ヨリ必然出向可致候間、御承知被下度候。何レ過頃〔カ〕来御談話之積之事ニ可有之に付而ハ、含雪將軍ニ面会スルヨリ前ニ閣下ニ御面会申候方可然哉、又ハ山県ニ面会ヲ前ニスル方可然與。閣下ト將軍トハ御隣家に有之旁、閣下ニ御面会スルヲ前ニシ、將軍之面会ヲ後ニスル節ハ將軍ニ於而何與閣下ト生ハ相談之上来り候モノトシ、疑念ヲ起シハ致間敷哉。若シ閣下之御面会ヲ前ニスル方可然必要ニ候ハバ、小生停車場ニ頃合見計停車場近辺へ御散策被成候而ハ如何哉。左スレバ小生ハ停車場側岡統〔カ〕之旅宿へ投入候様可然候。兎ニ角此書御落握ニ相成候ハバ直チニ御回電被下度候。小生ハ明朝八時半之汽車ヨリ出向可致積ニ御座候。至急右迄得貴意度。

匆々頓首

六月十七午後五時

顕正生

六石老閣

侍史

芳川がここまで会う順番を心配していたのは神経質過ぎだったようにも思われるが、このように細かい気遣いを続けた結果であろう、この後彼は閣僚ポストを歴任した後、山県枢密院議長のもとで副議長を務めることになる。いずれにしても、大磯は町の規模が小さく、到着後の一挙手一投足が人目につきやすかったため、このような気苦労を覚える者もいたということが分かる。

(四) 伊藤博文による邸宅利用の実態

一八九五年に創刊された総合雑誌『太陽』は当時人気を博して読者数を伸ばしていたが、同誌三卷二号（一八九七年一月）に「伊藤山県両侯爵を大磯に訪ふ」と題した興味深い記事が掲載されている。この記事は、同誌編集者の大橋乙羽が大磯に伊藤、山県、陸奥を訪問した記録で、伊藤の滄浪閣に最も長時間を割いて取材している。長文のため全文を紹介する余裕はないが、滄浪閣に関して特に重要だと思われる点を以下に列記する。

・大磯停車場から旧東海道を通過して滄浪閣に至る経路、滄浪閣周辺や正門・玄関の様子を描写している。滄浪閣の立地について「所謂大磯の町並を離れて、一路の松風露零つこと多き処」「まことに閑静な処」

¹²⁵ 一八九五年六月一七日・二〇日付陸奥宗光宛芳川顕正書簡（「陸奥宗光関係文書」）。

と表現している。

・伊藤が完成したばかりの西洋館で読書しながらインタビューに応じる様子が描かれている。伊藤が『智徳会雑誌』発行者である光村利藻の父親について語っている点、大橋の希望に応じてすぐに漢詩二首を墨書し贈った点、「唐本仕立の詩の本」が多数あり、伊藤がそれを読んで註をつけながら世間話をしていった点などから、伊藤が読書や漢詩を愛好し、大磯でもそれらに親しんでいたことが分かる。

・梅子夫人、末松謙澄夫妻、西源四郎夫妻（共に伊藤の娘夫妻）が滄浪閣に来ており、家族関係が良好であったことが窺われる。

・滄浪閣から見える景色が具体的に描写されており、富士山が「白扇倒に東海の天に懸って、侯に一筆讚を請ひたい程の絶景」であったこと、海辺の松の間からは遠く国府津の浜までもが一目に見え、「波に白帆の二つ三つ見ゆる様は、絵よりも妙」であることが絶賛されている。

・李鴻章筆の滄浪閣の扁額や中国画が室内に掲げられていたことが分かる。

・滄浪閣を訪問してきた山県と伊藤と一緒に楼上に上がり、囲碁に興じていた様子が描かれ、写真撮影の様子と相俟って、二人の信頼関係が窺われる。

・この日大磯には多数の訪問者があり、大橋は「群雄割拠の有様」「大磯は実に前内閣〔第二次伊藤内閣〕の後詰」などと表現している。

大磯在住時代の伊藤と山県は、この後政党との関係や議院内閣を認めるかどうかで鋭く対立していくことになるが、根底には信頼関係があり、大磯ではいずれかの邸宅でいつでも会えるという関係が続いていたと考えられる。両者が大磯で互いに往来していたことを示す記録は多数ある。詳細な考察を行なう余裕はないが、書簡で確認できる例をいくつか紹介する。

「只今桂子〔桂太郎子爵〕来訪御様子伝承。明朝参堂緩々可接拜唔候。」（一八九八年〔推定〕一月一日付伊藤博文宛山県有朋書簡）¹²⁶

「先日は度々御来光を辱し深謝の至りに候。其の後箱根辺御遊覧の由寒気如何と不堪想察候。〔中略〕明日桂伯〔桂太郎伯爵〕来磯可致との報知昨日寺内〔正毅〕陸相より申来候に付、御承知置可被下候。時刻の事は不申来、相分り候はば重ねて可申上候。」（一九〇二年〔推定〕一二月二二日付伊藤博文宛山県有朋書簡）¹²⁷

「来磯之上は尊庵〔弊〕屋いつれにても御都合に任せ会合可仕、予め達貴聞置候。」（一九〇五年〔推定〕一〇月二四日付山県有朋宛伊藤博文書簡）¹²⁸

日清戦後大磯は「政界の奥座敷」となっていったが、常にそうであった訳ではない。前述した一八九五年末から九六年初のように、第二次伊藤内閣と自由党との提携が政治問題となっていたような時には、

¹²⁶ 前掲、伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書』八巻、一三五頁。

¹²⁷ 前掲、伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書』八巻、一四〇頁。

¹²⁸ 前掲、尚友倶楽部・山縣有朋関係文書編纂委員会編『山縣有朋関係文書』一、一三九頁。

政客やジャーナリストが大磯に多数押し寄せ、「政界の奥座敷」は活性化した。一八九七年末に松方正義首相が辞表を提出し、伊藤に次期組閣命令が出された時もそうで、この年末から九八年初にかけては、大磯で大物の政治家や実業家の会合が頻繁に催された¹²⁹。しかし、内閣交代の時期であっても、大磯という地がそれほど重要な役割を果たさない場合も少なくなかった。例えば一八九八年六月に第三次伊藤内閣が総辞職し、「日本初の政党内閣」第一次大隈内閣（隈板内閣）が成立した際は、東京における憲政党の結成、その後開催された元老会議で後継首相が決まったため、大磯は政界の中枢を動かす場として機能する余地はほぼなかった。

もっとも、大磯には伊藤、山県以外にも大隈、西園寺ら大物政治家の別荘が増えていったため、日常的な政治活動や意見交換の場としては恒常的に機能し続けており、その意味では間違いなく「政界の奥座敷」であった。例えば伊藤は、一八九八年六月に首相を辞職するとしばらく大磯に滞在したが、この年から大磯に転居していた中島信行（貴族院議員）を訪問し、種々内談を行なっている¹³⁰。また伊藤は下野を機に清国漫遊を思い立つが、伊藤が大隈首相らの了解を得た上で大磯に戻った後、滄浪閣には多数の政治家や官僚が来訪し、大隈首相、板垣内相、林逋相も大磯に伊藤を訪問した¹³¹。また伊藤が大磯を出発した七月二八日には、大磯駅で梅子夫人、末松謙澄他五、六〇名が伊藤を見送った¹³²。伊藤は一月に帰国したが、この間日本では大隈内閣が内紛で倒れ、第二次山県有朋内閣が成立していた。伊藤は東京に戻って帰国報告を行ない、所用で名古屋に旅行した後で大磯に戻ったが、その後翌年初にかけて山県首相、西郷従道海相、大隈前首相、井上馨、桂太郎陸相、伊東巳代治らが滄浪閣に伊藤を訪ねた¹³³。一八九九年からは、渋沢栄一が大磯の旅館や貸別荘によく滞在していたことが確認できる¹³⁴。一八九〇年代後半から一九〇〇年代初頭にかけての時期は、大磯が「政界の奥座敷」として最も機能した時期であったと見られるが、その実態については稿を改めて論じることにはしたい。

おわりに

本稿では、明治期に日本を代表する別荘地であった大磯が、政治史上においてどのような機能を果たしていたのかを、山縣有朋、陸奥宗光、伊藤博文の別荘に注目しつつ、明らかにしてきた。

大磯が別荘地として発展するきっかけとなったのは、一八八五年のわが国初の本格的海水浴場の開設、一八八七年の東海道線延伸に伴う大磯駅の開設であった。以後大磯は富裕層が集う保養地として成長すると共に、彼らが定期的・中長期的に滞在する別荘地としても発展していった。大磯には、実業家、医師、軍人など様々な者が別荘を構えたが、別荘所有者中有力な一翼を占めていたのが政治家であった。本稿では、大磯が海水浴場として賑わい、投資目的の不動産取引も増加する中で、同地に別荘・邸宅を取得する政治家が増加した背景として、神奈川県知事を務めていた沖守固の役割が大きかったことを指摘した。

¹²⁹ 前掲、佐藤信『近代日本の統治と空間』一～四頁。

¹³⁰ 『東京朝日新聞』一八九八年六月二七日。

¹³¹ 『東京朝日新聞』一八九八年七月二六日。

¹³² この時の見送り客の中には、陸奥亮子、富貴楼のお倉もいた（『東京朝日新聞』一八九八年七月二九日）。

¹³³ 『東京朝日新聞』一八九八年十一月二七日、二九日、一二月九日、三日、一月一日、三日。

¹³⁴ 前掲、拙稿「近代日本政治と「別荘」」。

また、海水浴場開設の立役者である松本順や沖から情報を得ていたと思われる山県が一八八七年に別荘を取得したことが、大磯が政治的に重要な地になるきっかけであったことも指摘し、大磯では一八八九年頃から多くの政治家が集い、「政界の奥座敷」と言うべき状況ができたことを当時の新聞報道などから明らかにした。

大磯は日清戦争の頃から一層政治的に重要な機能を果たすようになったが、そのきっかけとなったのは、陸奥宗光、伊藤博文の別荘・邸宅取得であった。陸奥は、肺病の持病があったため、明治初期からしばしば横浜方面で静養することがあったが、日清戦争期の外交指導で体調を悪化させたため、静養を目的として大磯に別荘を取得した。本稿では、陸奥が沖から土地を取得したこと、大磯の別荘で静養しながら『蹇々録』執筆や伊藤博文、原敬などとの面会を重ねていたことを、『原敬日記』などに基づいて具体的に明らかにした。また、伊藤に関しては、彼が小田原に邸宅を建ててから大磯に転居するに至った経緯を明らかにし、転居以前から大磯に滞在する経験があったこと、陸奥が伊藤による大磯の土地取得を後押ししていたこと、伊藤は大磯を本拠とし、公私ともに大磯の邸宅を積極的に活用していたことなどを、新聞雑誌の報道などから明らかにした。以上の分析により、一八八七年から一八九〇年代後半にかけて大磯が「政界の奥座敷」と称されるに至った経緯を明らかにできたと考える。

このように大磯は、政界の第一人者たる伊藤と山県が邸宅を有していたがゆえに、大物政治家が集う結節点となり、「政界の奥座敷」と言うべき場となった。こうした状況は、両者が邸宅を構えていた明治末期（一九一〇年前後）まで続くことになるが、本稿では一八九〇年代後半以降の実態についてはあまり触れることができなかつた。また、一九〇九年に伊藤が死去、一九〇七年に山県が小田原へ転居すると、大磯は「政界の奥座敷」としての役割を終えていくことになるが¹³⁵、この点にも筆が及ばなかつた。これらの分析については、別稿に譲りたい¹³⁶。

¹³⁵ 一八九九年に伊藤邸の隣に別荘「隣荘」を構えた西園寺公望も、日露戦後あまり大磯に滞在しなくなり、一九一七年には同邸宅を池田成彬に売却している。

¹³⁶ さしあたって、前掲、拙稿「近代日本政治と「別荘」」を参照。